

果たして―シェーラはいたずらっ子のような笑みを浮かべ、答えた。  
「目には目を。歯には歯を。伝説伝承には伝説伝承を―」

その答えが今、体现されようとしていた。

町長の屋敷に集った騎士五百余名。

その誰もが血相を変えて、レオナートたちに詰め寄る。

「夜襲をかけるのならば、森の西側を迂回すればよいではありませんか、殿下！」

「駄目だ。ただでさえ長すぎる移動距離が、さらに伸びる」

たとえ替え馬があるうと、疲労の蓄積が不安になる距離だった。馬足をどれだけ残しておけるかは、騎士隊騎兵隊にとつての生命線にも等しい。

「ですがしかし、よりにもよって森の中を通らずとも！」

「駄目だ。その道以外は兄上だつて当然、警戒しているはず」

州都にいるだろう密偵に察知されることも避けられない。密偵が迂回路を通つてシャルト軍の野営陣に駆け込むより先に、夜襲をかけるためにも経路短縮は必須。森の街道を突つ切らない限り、問題がいくらかでも噴出するのだ。パウマンたちだつて冷静であればわかつたはずだ。

ゆえに、どれだけ再考を求められようと、どれだけの人数に押し寄せられようと――

「駄目だ」

レオナートは巖の如く屹立し、氣勢で押し返す。

「森を突つ切らずして、この夜襲作戦は成立しない」

肚から出した声で断言する。  
重い。

声音も、貫録も、何もかもが十八の青年にあり得ざるほど重い。

「二年前の戦を思い出せ。先代エイドニア伯は、四公家を怖れることなく援助してくれた。アランは我らと轡を並べて戦ってくれた。そして今、エイドニアを戦火に焼こうとしているのはディンクウッド兵だ。四公家の好きにさせておいて、おまえたちはそれでいいのか？ エイドニアの義に応える勇をおまえたちは持っているのか？」

「うう……っ」「それは……っ」

騎士たちが言葉に打たれたように怯み、たじろぐ。

その機を見逃さず――

「その子を――レオナートを信じよ」

――世にも妙なる女の美声が聞こえた。

よく通る声がさらにホールルの天井に反響し、玲瓏と一同に降り注ぐ。

「だ、誰だっ?」「どこにおる?」「姿を見せよ!」

突然のことに騎士たちの混迷は極に達し、おろおろと視線を巡らせる。

「上です! あそこの窓ですっ!」

シエーラが指差して叫んだ。視線が殺到する。

ホールの正面から見ても右。

東側の中二階。大きな木窓が外側から開け放たれていた。

三日目を背負うかのようにして、ペランダから美女が姿を覗かせていた。

誰もが喧騒を忘れ、息を呑むほどに麗しい。

足元まで伸びる黒髪は、夜空を切りとったかのように艶やかだ。

唇の色も黒。肩や胸元はおろか、右の素足も剃き出しの、扇情的なドレスの色も黒。美女の

白い肌をこれでもかと際立たせる。

月光を浴び、神秘的な微笑を浮かべる。

まさに神々しいまでの美貌で、超然と階下を見下ろしている。

「何者ですか!」

シエーラの問いに、美女が典雅そのもので返答した。

「わたくしは、夜の化身——」

「ええっ?! ならば貴女が女神ニユクスですか!」シエーラが驚愕しきって目を剥く。

追、真の演技だ。

何しろ相手は——あのペランダに立つ美女の正体はダリアなのだから。

彼女の一座に「最高の女優を貸してください」とシエーラが頼んだところ、「最高の女は高くつくわよ?」とダリア姐さん自身がしゃあしゃあと手を挙げたのだ。

先日アラランに向かつて「女は白粉で化粧ますわよ?」と言つてのけた女僕だが、まさしくである。月を背負った演出と、遠目に暗がりで助けられているが、今のダリアの神々しさは尋常ではなかった。その彼女がシエーラの筋書通りに芝居を続ける。

「然様。そして、そこなレオナートこそは吸血皇子。わたくしの申し子である」

レオナートを指し示す、一挙手一投足が堂に入っている。神秘的な容貌に威風が加わり、見る者を納得させる強い力がある。

「わたくしが全ての人間に等しく与えるのは、闇と恐怖。夜を徘徊するあらゆる魔物もまた、わたくしの眷属」

「ああ……なんと怖ろしい女神のですか、貴女は!」

自分の体をかき抱いて震える、シエーラの役者ぶりにも拍車がかかる。

「その子は我らが同胞。ゆえにその子にはわたくしの授けた、闇の加護がある」

「それはいったいどういうものなのです、女神ニユクスよ!」

「世に遍く闇が、眷属が、吸血皇子たるレオナートには味方するであろう」

「なんと！ 誠ですか!？」

「ゆめゆめ疑うことなかれ。夜の申し子の下へ馳せ参じた勇敢なる騎士たちよ、ゆめゆめ闇を怖れることなかれ」

「ああ……、なんと……!」 シェーラが感極まったように詠嘆した。

それを待つてレオナートがもう一度、肚から声を出す。

「俺は吸血皇子<sup>おれノスフエラトウ</sup>。俺は夜の申し子。その俺を信じ、ついてこい」

これも筋書通りの台詞だ。シェーラのように上手に言えた気がしなかったが、皆の熱い視線がレオナートに集中し、その隙にダリアはベランダの陰に隠れる。

「なんと！ もう姿が見えませせん!」 シェーラももう一度そちらを指して、「やはりあれはニクス女神だったんですね!」 白々しい台詞<sup>せりふ</sup>を、まるでわざとらしく聞こえぬ口調で叫んだ。

「確かに『まさしく』神の御業<sup>みわざ</sup>だ」という吹きがあちこちから聞こえた。

そもそも彼ら騎士たちは最初から、レオナートやシェーラを信頼しているのだ。

そんな二人の言葉であり、さらにダリアの美貌と名演技が説得力として加わる。

この時代、この大陸の、ごく真つ、当に迷信深い彼らを、信じ込ませる条件は揃っていた。

一種だました格好だが、レオナートに気後れはない。かつてロザリアに「士気を高めるため、気の利いた演出の一つや二つできるのも、将の器量」と薫陶<sup>くんどう</sup>を受けたからだ。

それで勝てるなら、より犠牲者を減らせるなら、方便を厭う<sup>いと</sup>方が偽善<sup>ぎぜん</sup>というもの。

「征<sup>い</sup>こう」

レオナートは最後に、そう一言だけ告げた。

それでも充分だった。

「応とも!」

声を揃えた騎士たちの返事には、勇氣と血気が満ち満ちている。

「総員、一時間以内に準備を終えて、宿場の北へ集合! 遅れるなよ!」

いざ戦となれば勝手知ったるバウマンが、当意即妙に指示を飛ばす。

騎士五〇七名が一齐に踵<sup>かかと</sup>を返し、軍靴を鳴らして屋敷を後にする。

シェーラを残して誰も居なくなつた玄関ホール。

「ダリアには後でよくよく礼を言わねばな」

「アラン様にたっぷりお金を吐いてもらいましょう」

シェーラは楽しげに笑った。

その笑顔をレオナートは見つめる。

お膳立ては全て彼女が整えてくれた。ここからは自分の領分だ。

行つてくる。勝つてくる。

「もちろん、信じてますよ。レオ様」

それらの想いを、口にせずとも彼女は酌<sup>く</sup>んでくれた。



レオナートが愛用する甲冑は、上から下まで全身黒一色だ。羽織のマントも漆黒。

かつてロザリアが贈ってくれたものだ。

目立つ意匠で、前面から背面にかけて波打ち広がる、流線形が特徴。不吉な色と合わせて、禍々しい印象を与える拵えだった。

戦装束なのだから、相手の士気をくじくこれこそ正当。

フルフェイス式の面甲を下ろすと、髑髏を模した細工になっている。

ザンザスの鞍に跨り、鎧に両足をかける。

愛馬にも意匠を合わせた、革と鉄でできた鎧を纏わせている。

手綱など引かなくとも、この賢い馬はすぐに主の意を悟って走り出す。

指揮官の作法としてわざと遅れて宿場の北へ向かうと、既に皆が集まっていた。

バウマンがその旨を報せてくれ、レオナートは厳かにうなずく。

「久方ぶりに全員集まると、やはり壮観ですな」

ひどくうれしげなバウマンの言葉にも首肯する。

みな軍馬に跨り、整列していた。

一同全員、揃いの格好をしていた。

黒、黒、黒、黒――

胸甲も、革の鎧も、マントも、髑髏の面甲が付いた兜も、総て漆黒。

かつてロザリアが組織し、彼女の趣向に染められた騎士隊の正装である。

レオナートに比べてかなり軽装で、馬に鎧を着けていないのは、戦う前に乗騎が疲れ果てるのを防ぐためである。重装にすると速度も大して出ない。膂力、速力、体力が化物じみたザンザスだからこそ、人馬とも全身鎧うことが可能なのだ。

まるで闇の底で、なお黒々とわだかまるが如き髑髏の騎士の一団は、見る者に尋常ならざる恐怖を与えるだろう。

レオナートは右手を厳かに挙げた。

「進軍！」ただちにバウマンが号令し、五百騎がしめやかに出発する。

夜闇の中、髑髏の騎士たちが咳きも立てず、整然たる縦列で進軍する様は、葬送に向かう死神の列もかくやだった。

州都へ向けて街道を二時間ほど、速歩で馬を走らせる。

やや手前に来たところで三十分の休憩。充分に馬を休ませ、再び進軍を開始した。

日付は二十五日になっている。

エイドンの南側に広がる耕作地を走り、東側にある牧場へ急行する。アランがそこで待っていた。牧場主に命じて、接収した五百頭の馬を臨時に管理させていたのだ。

そして、アランもまたアレクシス騎士隊揃いの胸甲を着けていた。

「この二年間ずっと、君たちともう一度戦場を駆けたいと想っていた。でもそれが叶うのが、こんな状況だなんてね。全く面目ないというか」

複雑そうな表情を浮かべるアラン。レオナートは答えてずばり、

「一石二鳥だ」

「ハハハッ。なるほど、そうとも言えるな。いや、参った。麻のように乱れた僕の心も、レオにかかればまったく快刀乱麻だ」

互いに拳を軽く打ち合わせる。

その間にも麾下の騎士たちは馬を替え、乗ってきた軍馬は後ろに引き連れて、牧場を発つ。

千頭もの馬を走らせれば、州都にいるだろう密偵に察知されないわけがない。

いよいよ急がねばならないが——行く手に森が見えてきた。

鬱蒼と生い茂った枝葉が月光を通さず、闇を凝縮したかのようにそこは暗い。

来る者を寄せつけぬような、圧倒的な不気味さがとぐろを巻いている。

どんな魔物が潜んでいても不思議ではないどころか、森そのものが何か巨大な怪物かのよう。

街道を駆ける騎士たちの中に緊張が走った。

実物を目の当たりにし、少なくない者たちが及び腰になっている。

それを察してレオナートは小声で囁く。「ザンザス」

帝国随一の奔馬は応えるように嘶き、グンと速度を上げ、いの一歩に森の中へと突っ込んだ。「殿下に遅れるな！」パウマンが吠えると、挑戦心を煽られた騎士たちが競うように続く。

見事、五百騎が誰も脱落することなく森の中を進軍する。

通ってみれば、街道は切り開かれている分、周囲より明るいのがわかった。

夜目が利くレオナートはなんら不自由を感じない。

まして馬は人間より遙かに利くのだ。足元の悪い獣道を行くでなし、任せておけば勝手に走る。方向感覚すら鈍く、ひ弱な二本足の人間とは違う、逞しい生き物なのだ。

レオナートとザンザスが先頭さえ切っておけば、他の馬は習性でついていく。

しかもシェーラは石橋を叩いて渡る慎重さで、接収したこの馬々には十日も前から、近辺の街道を行き来する訓練をさせている。馬が道を憶えている。

順調も順調、なんだこんなものかと胸を撫で下ろす者も多かった。

一方で、五百人もいればどうしても怖気づく者たちがいるものだ。

「やっつ！ あそこに何やら不気味な影が！」

「よく見ろっ。ただの夜鳥だ」

「ややや！ 女の嘍り泣くような声が急に！」

「ただの狼の遠吠えだっ」

「やややや、狼!? 危険ではござらんかっ」

「阿呆。これだけの馬の群れを襲おうとする狼などいるものかよ」

「奴らは元々、臆病だと軍師殿から説明を受けていただろうが！」

と——一人が闇の中にもりもしない脅威を見つければ、周りが窘め、嘩し立てるといふ光景があちこちで見られる。

「我らが先陣を征くは吸血皇子ぞ！ 何ものも怖るるに足らず！」

「「応とも！」」

アランが鼓舞し、騎士たちが応える。口の達者な奴がいてくれると助かる。無論、かつては悪名だった「吸血皇子」の異名を、逆手にとつて利用してみせるシェーラの強さも。

レオナートは内心頼もしく思うがその実、先頭を走る彼の巨きな背中こそが騎士たちに勇気を与えているのだと、本人が気づいていない。

やがてついに、森を抜けた。

騎士たちが歓声を上げる。

「馬鹿もん！ 本番はここからだろうが！」 バウマンが叱咤するが、声の明るさを隠せない。

レオナートを除く全員が、急いでまた馬を替えた。自分たちの愛馬である軍馬の鞍に跨った。

しばらく何も載せずに走っていたため体力はたつぷりと残っている。

ここまで来るのに使った馬は置いていく。軍馬ではないから、戦場では役に立たないどころか邪魔になる。期待通り、街道を抜けるだけなら充分に役目を果たしてくれた。

「急げ急げ急げ急げ！」 バウマンが早口で急ぎ立てる。

縦二十、横二十五列に整列し直す。

レオナートはそれを見届けて、再び先陣切つて駆け出した。

森の西の迂回路を州都の方へと、シャルト軍の背を追いかける。

五百の鬪饅騎士たちが、黙然と行軍する。

進むことに昂る闘志を研ぎ澄ませ、銘刀の如く寂かなものへと変えていく。

その切っ先を突き立てるべき敵が——前方に見えた。

篝火の灯りがまず目に入る。

次いで、仄暗く照らし出される天幕の数々。略奪品を満載した荷車を幕営の周囲に並べて防壁代わりに使っていたが、三千人からの野営地を囲むには少なすぎ、本当に申し訳程度だった。

レオナートは意識を凝らして気配を探る。

こちらに気づいて、騒然となっている様子は？ ——なし。

息を潜めて待ち構えている様子は？ ——なし。

密偵が駆け込み、本営が慌ただしくなっている気配は？ ——なし。



形に削り出して完成させるといふ、手間も金も時間も惜しみなく注がれた逸品にして一点物。匪賊討伐の褒美で皇帝が——レオナートという鬼子のために、相応しい武器をと思つたのかどうか——詭をさせたもの。

その重量は四十斤(約二十四キログラム)を超えており、如何にレオナートが剛力の持ち主であつても、右腕一本では到底振り回せるものではない。だから腕力以外も使つて振る。背中や腰、さらにはその内側に眠る筋肉全部を動員しなくては、この大薙刀は扱えない。

常人ではまず辿り着けなかつたその正解に、レオナートは絶え間なき鍛錬によつて独力で至つたのだ。己の身体、筋肉の動きを精密に内省し、自在に操る修練を果てなく重ね、この鉄塊を振る骨をつかんだのだ。

誰に教わることもなく、己の才覚と努力のみで武を極める。

それはまさに野生の獣の美しさと同じもの。

獅子の芸術。

ザンザスを駆るレオナートの眼前に敵兵が迫る。

不寝番をしていた革鎧姿の男だ。恐らくクリメリアの歩兵だろう。手には普通の長さの槍。逃げきれぬと見るや、ヤケクソ気味に突いてくる。

だが、レオナートが薙き払う方が速い。

縄のような全身の筋肉が、うねり、しなる。

肚の下から発生した脊力が背骨を伝っていくかのように、じわりと、他の筋の力と合わさりながら昇つていき、右腕の先へ、長柄の先へ、切っ先へと行き渡る。

大薙刀が唸りを上げる。

そうして発生した全ての力が、男の腹一点に叩き込まれた。

レオナート自身の筋力のみならず、ザンザスの突進力、長柄武器を振り回す遠心力、さらには速さと大薙刀の重量、それら全ての力である。機能的に連動し、相乗効果すらを生んで——

男の胸が鎧ごと真つ二つになった。

全くの比喩ではなく。一切の誇張なく。

悪夢じみたその光景に、他の敵兵たちが腰を抜かす。股間を濡らす。

レオナートたちは情け容赦なく馬蹄で踏み潰した。

ここで逃がせば、いずこかで再集結されて、エイドニアが焼かれるだけだ。慈悲はかけない。恐懼をきたして逃げる敵兵たちを、正面からだろうと背中からだろうと草の如く刈り払う。

「見ろよ、レオ！ パイク兵だ！」とアランの警告。

無論、レオナートも見えていた。

パイク兵たちが四、五十人ほど寄り集まって、横列を組もうとしている。



騒ぎを聞いて、いち早く目を醒ました連中だろ。対応が早い。良い兵だ。

しかし、その程度の数の槍袞では話にならない。

「続けえ！」レオナートはむしろザンザスの速度を上げた。

バイク兵たちが大急ぎで得物を構える。騎兵突撃に耐えるため、石突を斜めに地面へ差して固定し、穂先は上向け、二人一組で柄を交差させる。そうやって全員で、槍でできた壁を作り出す。バイクの長ささは三間を超える。そこに騎兵が突っ込んでいけば、攻撃もさせてもらえず串刺しという寸法だ。

だが、レオナートは槍袞目がけて、委細構わず斬り払った。

強烈無比の一刀。

十本を超えるバイクが柄のところで両断され、十人を超える兵が武器を失う。

そこへザンザスが突進して蹴散らす。

レオナートが道を切り開き、後続のバウマンたちも突っ込んで傷口を押し広げる。

バイクは揃って構えないと役に立たない武器。こうなるともうおしまいだ。

素早い対応を見せた四、五十人のバイク兵たちが、その優秀ゆえに命を散らした。

レオナートを止められる者はいなかった。

ゆえに鬮腰騎士たちの突撃は止まらない。

そして、シャルトの兵たちの壊乱かいらんもまた止まらなかつた。

まずまず怖れ、慄おのき、右往左往する。

武器を捨て、我先に逃げ出す者が続出する。

「待てよ！ いったい何が起きてんだ!？」

「怪物みたいな馬に乗った、怪物みたいな騎士が、化物みたいな大雑刀を振り回してんだよ！」

「はあ!？」

「いから死にたくなけりゃあ、おまえも逃げろっ」

「ああ……っ、もうそこに！ そこに！」

「……なんてこった。……オレたちは死神に目をつけられちまっていたのかよっ」

と——目が醒め、遅れてやってきた者たちにもパニックが伝染するばかりで、シャルト軍はいつまで経っても組織的な抵抗ができない。

こうなると三千人を超える兵がいようが関係ない。部隊というものは、統制の元に兵士個々を結集して初めて機能し、その恐るべき暴力を發揮するのだ。

今、レオナートにはそれがあり、シャルト軍にはそれがない。

もはや鬮腰騎士らの行く手を遮るものはなく、一方的にグレイヴを振り、片端から殺戮ざつりくし、篝火を蹴倒して、天幕を手当たり次第まだ中にいる寝惚け眼の兵士ごと燃やし尽くした。

「なんだこれは……」  
ケインズは愕然がくぜんとなつて眩くらいた。

野営陣のほぼ中央、一際立派な天幕から顔だけ出して周囲を見回す。

何やら騒々しいと思つて目覚めれば、あろうことが夜襲を受けているではないか。

黒々とした騎士の一団が暴れ回り、逃げ惑うシャルト軍の兵を斬り払い、こちらへ向かつてきているのが見える。

奴らを通つた後は、焼き払われた天幕で一面赤に染まっている。

「だ、誰か！ 誰かおらんのか!?」ケインズは顔面蒼白そうはくになつてわめき散らした。

しかし、どこからも返事はない。

この天幕のすぐ傍かたわらには警護の兵がいたはずだが、姿が見えない。

「オレを置いて逃げたな！」ケインズは癩癩れんれんを起したがそれで助けが来るわけもない。

そもそも、異変を報せる者が一人もいなかった時点で、連絡系統が機能していないことを悟つて然るべきだった。

「誰か！ 誰か！ なんとかいたせ！ ……ええい、なぜ誰も応えぬか!? 次のクリメリア伯たるオレの命令だぞ!」

ケインズは受け入れがたい現実を目の前にし、さりとて何も打つ手を思いつけず、先祖伝来の剣を鞘さやから抜きもせず抱きかかえ、親の助けを待つ赤子のように、情けなくわめき続けた。

するといきなり、後ろから突き転がされる。

「何をするか、下郎！」ケインズは突つ伏した顔を跳ね上げて怒鳴つた。

見れば、裸に剥かれた年端としはもいかない少女が、怯おそえた顔をこちらに向けている。

先日、逃げ遅れた避難民を襲つた時に、捕まえた娘だ。

他の兵たちには許さなかったが、ケインズだけ連れ歩いて慰み者なぐさにしていた。

今夜もまた、縄で後ろ手に縛つたまま欲望のはけ口に使つてやると、生氣のない表情でぐつたりとしていたのに。騒ぎを聞いて逃げる好機こうきだと考えたのだろう、小癩こぢにもわかに活気づいていてではないか。

「このオレを見下ろすな!」

ケインズは跳ね起きると剣を抜き、ただの八つ当たりで斬りつける。

哀れな少女には抵抗する術などなかった。

「クソツ。オレも早く逃げなければ……」

骸むくろを足蹴あしげにしつつ、いま何をすべきかをその少女から、ケインズは無意識下で学びとる。

まずはともあれ馬の確保だ。

そう思い立ったケインズの耳に、馬蹄ばていの音が近づいてくるのが聞こえた。

それも無数の。

「げえ……っ」ケインズは絶句する。

まごまごしているうちに、鬪腰騎士の一団がかなり近いところまで迫っていたのだ。完全に逃げ遅れたことを知って、震え上がる。

中でも、先頭を駆ける騎士の怖ろしさは異彩を放っていた。

大薙刀の一振りごとに兵たちの首が飛び、胴が両断される。

鬪腰の面甲と相まって、夜な夜な命を刈り取るという死神を彷彿させられる。

その仮面の眼窩の奥で瞳が赤く禍々しく、爛々と輝いているではないか！

(助太刀に来ていたのか……っ)

ケインズは直感した。

あの死神こそがレオナートだと。

なぜなら、渾沌大帝の有名な逸話を思い出したからだ。

かの真君は黒髪虹瞳だったと伝えられている。

感情の起伏により、瞳が七色に変わったのだ。

その特異な体質は彼の息子たちには遺伝しなかったが、三代大帝となる曾孫は一色だけとはいえ瞳の色を変じたという。

大帝国分裂以後も各国の帝室に時折、先祖返りのように瞳の色が変わる皇子が生まれる。

レオナートもまたその一人だったのだと、ケインズは畏怖とともに知った。

「降参する！」ケインズは絶叫した。

酔いが醒めたような想いだった。シャルトの才気の眩しさに目が眩み、自分が誰に立てついていたのか、その間抜けにようやく気づくことができた。

帝宮で雑種と陰口叩かれる、あのレオナートこそが正真の、渾沌大帝の後胤ではないか。

あんな怪物の裔と戦って、勝てるわけがなかったのだ。

自分は、下につくべき相手を間違ったのだ。

憎らしいが、アランこそが正しかったのだ。

「オレが——いえ、わたくしめが悪うございました！ どうかどうか、あなた様の郎党の、末席にお加えくださいませ！ 心を入れ替え、全身全霊をかけてお仕え申し上げます！」

その場に膝をつき、地面に額つき、大声で訴える。

「今までのご無礼に対し、まず罰を受けよと仰られるなら受けます！ ですからどうか、命ばかりはお助けを！ 平にご寛恕を、殿下！ レオナート殿下！」

声を枯らして訴える。

ケインズは疑わなかった。

レオナートが許してくれることを。自分のような有能な士が、由緒正しき次期クリメリア伯爵が麾下に加わることを喜び、大手を振って迎え入れてくれることを。

心の中から信じきっていた。

だから、ずっと平伏したまま嘆願し続けた。

その背中を馬蹄で踏み潰されるまで、ずっと。

絶命だ。馬の体重が乗りかかれば、人間の脆い体など一撃。

彼の太った死体が馬群に飲み込まれ、何百もの蹄に潰され、ぐしゃぐしゃに打ち伸ばされていく。肉塊どころか肉片に変わっていく。

五百騎を率いるレオナートに、ケインズの声など蹄の音にかき消されて聞こえなかった。夜闇と戦の最中、ザンザスの足元にうずくまる背中など見えなかった。

そう。ケインズを討ち取ったことなど、レオナートは永遠に気づかなかったのである。

「なんだこれは……」

シャルトが愕然となって呟いた。

聞いていたトラームは、芸のない台詞だなど思った。まるでケインズ辺りが言いそうな。

(見ればわかるだろうにねえ)

口に出すには憚られる言葉を、代わりに胸中でばやく。

トラームは眠っていたシャルトの身柄を無理矢理押さえ、自分の馬の後ろに載せ、従者たちとともにとつくに野営陣を逃げ出していたところだった。

(負け戦ですよ。痛快なまでのね)

十分に距離がはなれたところで下馬し、戦場を振り返る。

陣が燃えていた。

黒衣の騎士たちだけが勇敢に駆け回り、逃げるか散発的な抵抗を行うだけの兵たちを、作業の如く斬り伏せていた。

その一方的な蹂躪を見ても、トラームに驚きはしない。

よく鍛えられた彼は熟睡していても、誰より早く蹄の音を聞いて跳ね起きることができた。

不可捕の狐と異名どる彼は、そんな距離まで夜襲を察知できなかった時点でもう、自軍が敗北したことを完璧に悟っていた。

ここまでシャルトに一切の落ち度はなかったと、トラームも自信を持って言う。

なのにこんなことになっているのは、アランの陣営に圧倒的劣勢を智謀でひっくり返す、図抜けた軍略家がいるということ。

傭兵時代に会った、大古株の爺様がさういふのと出くわしたそう。

曰く、「負けた方はまるで、悪い精霊に化かされたような気分おちいに陥らされるのだ」と。

トラームはまさに、まさにと納得した。

なんの未練もなく兵を囿おとりに逃げることを決め、従者たちとシャルトだけを連れ出した。

昼間、言い知れぬ予感を覚えていたトラームはあらかじめ、従者たちにいつでも逃げ出す心

の準備をするよう命じておいたから、彼らが逃亡する分には全く混乱はなかった。納得できていないのは皇子様だけだ。

「引き返せ、トラーム卿！ 私がいなくては兵たちの指揮をとれんつ。このままでは負けだ！」  
「……どうかご理解ください。殿下」

「何を理解せよと言うのだ!? 卿こそ理解せよ！ ……まだ私は負けておらぬ。見よ！ まだ兵がいる。私には三千の兵がいる！」シャルトが野営陣の方を指して唾を飛ばす。

確かにトラームの目にも、大勢の兵が見えた。涙と涙を垂らしながら逃げ惑い、無様に背中から斬られていく哀れな兵たちの姿が。たくさん。

「諦めてください、殿下」

「ふざけるな！ このシャルトの名に敗北の泥を塗れと言うのか!? まして、アランの如き軟弱者を相手に!」

「いえ、あれはエイドニア伯の兵ではありません。アレクシスの騎士隊ですよ。有名なので知ってます。全部、繋がりました。あれを率いているのはレオナート皇子だ」

トラームは背筋に寒気を覚えながら、髑髏騎士たちの親玉を見る。

瞳に赤光を灯らせ、異様に大きなグレイヴを棒切れのように振り回して、当たるに幸い兵を鑿殺する。止まらない。止められない。

これほどの武人、トラームですらちよつとお目にかかったことがない。

こんなに遠い距離から眺めているだけなのに、鳥肌が収まらない。アレとは絶対に戦うなど不可捕の狐の本能が最大警鐘を鳴らしている。だというのに、

「レオナートだど!? 雑種に敗北するなどますます私の矜持が許せん！」

シャルトがヒステリックにわめき散らした。  
(それは矜持ではなく虚栄心では?)

そう指摘するのをぐっと堪えるトラーム。

「もうよいわ！ 臆病者は勝手に逃げよ。私は一人でも行く！」

「参りましたなあ……」本気で弱り果てる。

ディンクウッド公に命じられていたのだ。

もし万が一に負けても許す。ただし、シャルトを死なせたら斬首に処す。  
(さあて……なんとか切り抜けないとマズいぞ)

斬首されるくらいならトンスラこくが、騎士の地位を手放すのは惜しい。

この皇子様を説得するのが一番いい。どんな言葉なら耳を貸してくれるだろうか？ 二週間以上も一緒にいたのだ、人となりはつかめている。例えばこうだ。

「歴史を紐解いてくださいませ、殿下」トラームははしかつめらしく言った。「古えに名將と謳われた者は数いれど、百戦して百勝した者は一人もおりません」

「詳しく探せば一人二人はいると思うが、そこはハッターだ。」

「む……っ」シャルトも真に受け、目の色を変える。

皇子様がかけて欲しいだろう言葉を考え抜いて言つてやったんだから、食いつくのは当然。「しかし、彼らは只では負けません。敗戦を糧かたに、より強い将へと成長した。失敗から必ず学び、同じことを繰り返さなかった。だから彼らは名将となったのです」

「……確かに卿の言う通りだ」

「殿下もそうあるべきだと存じます。きつとデインクウッド公もそう望んでおられます」

「……うむ。……うむ」シャルトは何度もうなずいた。

トラーメはこつそり拳を握る。固唾かたずを呑んで見守っていた従者たちも安堵する。

そんな空気を露知らず、シャルトは夜空を見上げ、両手を伸ばした。

「天よ、百難を我に与えよ！」

真顔で叫んだ。

（あれだけ兵を殺しておいて、よくぞ自分に酔えるものだ）

トラーメはいつそ感心する。

格好のいい言葉だと思つたが、どうせどこかの古典から引用したのだろう。

「参りましょう、殿下」内心を完璧に包み隠し、トラーメは揉み手で提案する。

「ああ。ついてこい」シャルトは馬腹を蹴り、燃え盛る野営陣に背を向けた。

一切、後ろを振り返ることなく走り去る。

それは潔さの美德の価値を思い出したのかもかもしれない。

レオナートらの勝鬨かちどぎを聞きたくないだけなのかもしれない。

トラーメはそう思った。



レオナートらはシャルト軍の野営陣を蹂躪し、徹底的に焼いた後、掃討戦に移行した。

五十騎一組に別れ、逃げ散った敵兵を根絶やしにせんと追いかけるのだ。

残酷ではない。決して。落ち武者を見逃せば、匪賊化してその後も延々領民を苦しめるのが相場。シャルトも依然、行方不明のままだったし、身柄を押さえたところだった。

時間は日の出までとし、勝勢に乗った麾下の騎士たちは、夜を徹して精力的に働いてくれた。あちこちで惨劇と流血が撒き散らされ、やがて、白み始めた空が殺戮の痕を儂く照らし出す。

夜の眷属たちの時間が終わったのだ。

騎士たちは鬮籠の面甲を上げると、堂々、灰燼かいじんと帰した野営陣跡に集結する。

シャルトの行方は不明のままだった。

「素晴らしい逃げ足でござるな」バウマンが言い、レオナートがうなずく。

押揃や揃しているわけではない。実際的な軍人であるこの二人からすれば、完全に褒め言葉だ。

レオナートはてつきり、シャルトは見栄が邪魔し、討ち死にを選ぶタイプだと思っていた。だから見直したほどである。

逃がしたものは仕方ない。割り切り、州都へ帰還の道をとった。

途上でパウマンが他の騎士たちの様子を調べてきてくれたが、軽傷者が出ただけという。

戦明け、徹夜明けの疲労すらどこか心地よく――

レオナートとアランを合わせた五〇九騎が、揃って州都へ乗り入れた。

たちまち歓声に包まれる。エイドニアの兵たちが、領民たちが、手を振って迎え入れてくれたのだ。目抜き通りの左右を彼らが埋め尽くしている。

その真ん中をまずレオナートとザンザスが、隣り合ってアランが、やや遅れてパウマンが進む。その後ろは、シャルト軍に奪われた品々を荷車に載せて馬で引かせている。さらにその後ろが、己らにこそ正義ありと示すため、閲兵式の如く乱れのない馬上行進をする騎士たち。州都を守った一行へ、道の左右から最大限の賛辞と喝采が惜しみなく降り注ぐ。

「応えろよ、レオ」

「領主はおまえだろう」

「でも、大将はレオだろう」

互いに譲り合い続けるのも馬鹿らしく、二人同時に手を挙げて歓声に応えた。

レオナートはむつつり、遠慮がちに。アランは破顔して高々と。

歓声がさらに大きくなり、もう割れんばかりになる。

誰もが笑顔だった。

レオナートは眺め回して、改めて自分がこの手で守ったものの価値を再確認させられた。

(本当によいものだ。凱旋とは)

匪賊討伐の時もいつも思う。そう、アレクシスでは誰も、何も守れなかった。両手のまめをどれだけ潰しても、敵兵の返り血に塗れても、全てはそこから零れ落ちていった。

辛すぎるその記憶が、想いが――ほんの少しだけとはいえ――癒されるような気がするのだ。人々はレオナートがエイドニアを救ったと褒め称えてくれてるが、レオナートの方こそ救われたような気がするのだ。

ふと――

群衆の中から、まだ五、六歳の少女がふらふらと跳び出す。

格好は薄汚れており、恐らくはエイドンの民ではなく避難民だとわかる。

パウマンが「あっ」と叫んだ時には、ゆっくり進む荷車へと背を伸ばし、山のように積まれた中から何かを取り出す。レオナートがザンザスを止めて目を凝らすと、少女の小さな手には銀製の櫛が大事そうに握られていた。

「待ちなさい、お嬢ちゃん。勝手にとっちゃダメだよ」パウマンが馬を下りて駆け寄る。

荷車の上の物は全て、奪われた避難民に返さなくてははいけない。誰が誰のものはもう証明

しようがないから、アランが責任を持って金に換え、保証金として再分配するしかない。

その櫛とて、確かに少女の大切な物だったかもしれないが、たまたま目に入った綺麗な物を手にしてしまったかもしれない。あるいは似ただけの他の誰かの物という可能性も。

「よい、バウマン」だけどレオナートは少女の行為を認めた。「皆もこれくらいはよかろう?」  
 群衆に向かって広く問いかけた。

どこからも反対の声は出ない。

目抜き通りの左右には避難民らしき者も大勢いたが、不公平を唱えたりしない。

レオナートとてこれが偽善だとはわかっていた。群衆もきつとわかっている。

ただもう、いきなり理不尽に戦火に巻き込まれて、着の身着のままに逃げて、毎日歩き詰めにさせられて、いつ敵兵がやってきて虐殺されるかと恐怖に怯え続け、疲れ、ささくれ立った彼らの心が、何でもいいから胸温まるものを求めているのだらう。

じっと櫛を握りしめ一言もなくただ喜ぶ、いとけない少女の姿には、その温かい何かがあったのだらう。

レオナートらは勝利し、ひとまずの危機を打ち払った。

しかし戦後処理はここからが混迷を極める。アランの苦勞は始まる。政治のことがわからぬ民たちだとて漠然とながら、自分たちの窮状が今すぐ終わらないことを感じとっている。

それでも今この瞬間。

ここにいる全ての者が、少女の姿に希望を見たような気がした。

たとえそれが錯覚でもいい。

希望というものは生きていこうという心の活力、それ以上でも以下でもないのだから。